

「三田尻諸御船御作立一件」（毛利家文庫9諸省37）

# 防長と海



その記録と記憶

## 25

港と船③

## 船玉（船霊）

### 【船玉と船大工】

船玉（船霊）は船の守護神で、多くの場合、和船の帆柱の受材である筒（つつ）の下部に小穴をあけ、納物として糴・賽（サイコ）・五穀・銭などが封入されます。

この封入の儀礼は、萩藩の御座船（藩主が乗り込む船）建造の記録等では「筒居（つつすえ）」と記されており、造船儀礼中で最も重要な行事とされていました。

上の写真は、万治元年（1658）に萩藩が御座船を建造した際、以前に建造した関船の造船儀礼を参考にしたものです（解説シート24参照）。

これによると、関船の「筒居」の儀式は、「筒」の前に祭壇を設け、ひな（糴）12・双六のさい（賽）1めん・五穀・銭12枚等を供え、その後「筒」の下部に封じ込めるものだったようです。

その際、「船玉祭文」等が読み上げられます。その祭文は秘伝とされていましたが、萩藩と同じく境流を学んだ土佐藩の船大工が伝授された船玉祭文が知られています。

萩藩の船大工であった小林長太夫家の堯慶は、元文4年（1739）の御座船坤

厚丸建造のときはまだ幼少で、先代の父もすでに亡くしていましたが、見習いとして船の下回り等の作事を手伝い、筒居の儀式のときには船大工の家として船玉祭文の読誦を仰せつけられています（解説シート24参照）。

船玉として封入される呪具については、民俗調査等から漁船をはじめとする小型和船のものが多く報告されていますが、それらと比べて住吉丸のものは雛人形の数がとびぬけて多くなっています。

ところが、萩藩の船大工が御座船の建造にあたって用いた「境流」では、その秘伝である「船玉祭文」のなかに「筒立之御祝儀」として「糴十二女男」とありますから、境流の作法としては正しいこととなります。「さい1めん」というのは、あるいはさいころ2個一対を合わせた形のものを作ったのかもしれませんが。

「筒」に船玉をこめるという作法は、航海神として名高い住吉神社の祭神「筒男（ツツノオ）」を思い起こさせますが、船玉祭文には数多くの神仏が読み込まれており、安全祈願のオンパレードの様相を呈しています。



「船玉命海上開運刷札」  
（原田家文書（防府市）1002）

修験者が船玉の祭祀に関わった例は多く知られており、この刷札もその一例かもしれません。

海上において船の位置を知るには山の重なり具合を見る「山見」という一種の三角測量法が行われていましたが、その目当てとなる高い山上の祭祀には、多くの場合修験者が関与していました。

【船玉と修験者】

さて、当館には、以上のものとは系統を異にすると思われる船玉祭文の断簡が残されています（写真右）。

この資料は年欠のうえ前欠・後欠ですが、船の始源から説き始めて、船玉の根源を熊野の十二社船玉大明神とし、船の各部分や船具を、さまざまな神仏になぞらえています。そして、「帆柱の根本に祭る船玉」は、「骰子（サイコロ）二タ粒・雛一对・尺長髪七[拾]・寛永通宝拾式銅を祠こめ」とし、納めるサイコロの向きを説いています。

この資料は、徳地町（現山口市）の修験の霊場、山口県において「東の狗留孫山」と呼ばれた金徳寺あたりの修験者にかかわる可能性があります。

同様に修験者が船玉に関わった例として、九州英彦山の修験が船玉の神札を配布していたことが知られており、確証はありませんが、前頁写真の「船玉命海上開運刷札」は、あるいはその種のものの一例かもしれません。民間の船（商船や漁船など）の船玉の祭祀には、このような民間の宗教者の関与もあつたと思われます。

【丙辰丸と船玉】

ペリー来航後に大船建造の禁が解除されたこと等から、長州藩は安政3年（1856）に洋式帆船を建造しました。2本マストの軍艦「スクーネル船」（「丙辰丸」）と1本マストの「バッテリー船」です（解説シート26参照）。

興味深いことに、これらの洋船にも、和船の伝統に従って船玉が祀り込まれました（「丙辰丸製造沙汰控」毛利家文庫15文武99）。その内容は、

スクーネル船：錢24銅・賽2対ほか（雛なし）

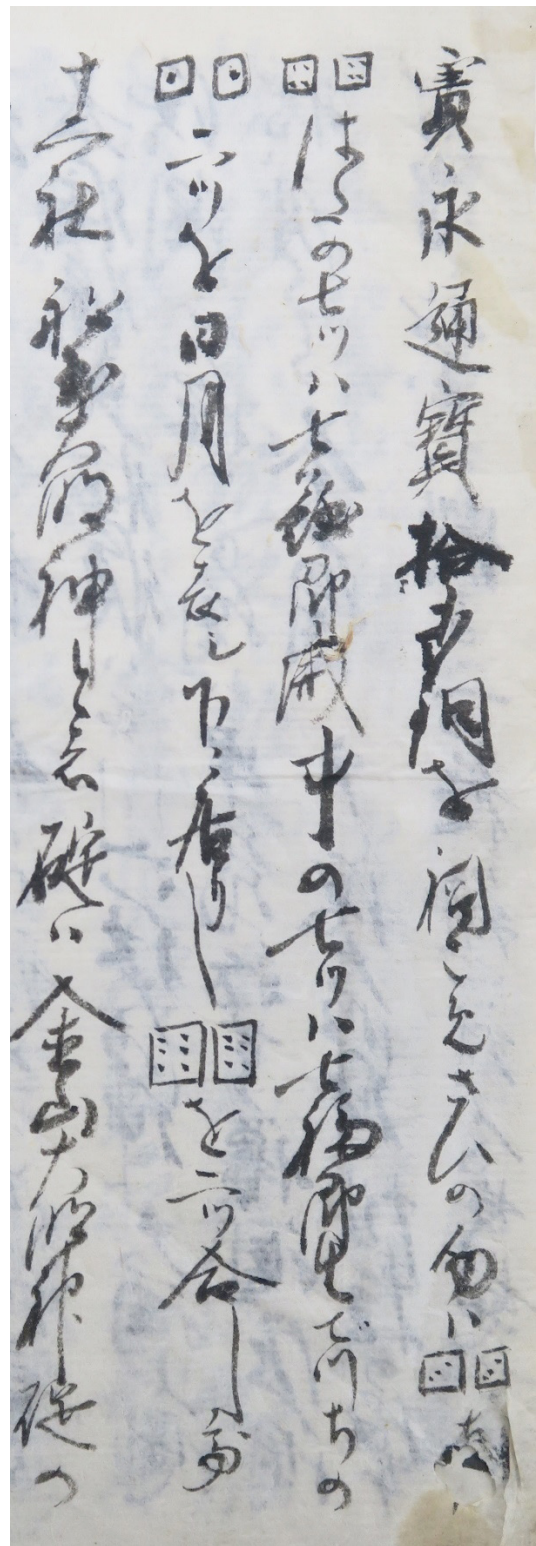
バッテリー船：錢12銅・賽1対ほか（雛なし）

となっており、前者が後者の倍になっていることが注目されます。

これが、マスト（帆柱）の本数と関係するのであれば、この船の建造に当たった船大工は、船玉を「帆柱の神」と捉えていたのかもしれません。



役割を終えた漁船のものと思われる船玉（平郡東 海童神社）



写真③ 「船守護神覚書」（山田家（徳地町）41）（サイコロの置き方を記した部分）

寛永通宝拾式銅を祠こめ、さいの向八[ ]  
 [ ]、はたの七ツは七難即滅、中の七ツは七福即生、でっちの  
 [ ]ニツを日月を表シ、下二居り[ ]をニツ合して  
 十二社船玉大明神と言、碇八金山大明神、碇の…

このサイコロ二つは、いわゆる「天（上）一、地（下）六、オモテ（前方）見（三）合わせ、トモ（後方）仕（四）合わせ」の置き方で、「はた」＝舷つまり外側の二と五を足して七（七難即滅）、内側の二と五を足して七（七福即生）としています。荷船によくみられる「中に荷（二）を積む」置き方ではありません。

資料中の「でっち」は一のぞろ目のことをいいます。